

## 優秀賞

# 人権について考えた事

大阪市立文の里中学校 三年 横山 よこやま 史華 ふみか

人権「一人ひとりをかけがえのない個人として尊重され、個性を認めすべての人を平等に守られる権利」そういわれてみると、自分は他者の人権を尊重しているし、自分自身も周りから人権を尊重され守られていると思う。でも人権とは言葉でくくられる簡単なものではなく、もっと深いもののような気がする。だからもう一度よく考えてみる。「人権」とはいったいどういったことなんでしょうか？

私は、どんなことでも一生懸命とりくむ姿勢を大切にしている。しかし一生懸命とりくんでもうまくできることの方が少ない。五十メートル走を一生懸命「速く走ろう」と意気込む。脇をしめて腕をふり、足の太ももをふりあげて速く速く……しかしいつもクラスで一番ビリ。水泳の授業でプールで必死に泳ぐ。イメージはオリンピック選手が泳ぐようなフォー

ムでスイスイと……しかし見ている人にはおぼれているようにしかみえないらしい。タイムももちろんみんなより遅い。字をきれいに書きたいと思う。一生懸命「ていねいに」文字ずつゆっくり、ゆっくり。」そう言いきかせて書いてみてもなかなかきれいに書くことができない。要領よくテキパキ何でもできることにはあこがれるけど、私はなかなかうまくいかないのがいわるゆる私の個性らしい。「みんなちがってみんないい」そう自分で自分に言いきかせる。周りの友だちは「どんくさいわ」と笑って言うけれど、決してバカにされている言い方でなく、それが私だと認めてくれていたようなのだ。だから体育大会や水泳大会等の行事で出場種目をクラスで決める時、一番私が負担のない種目を優先的に決めさせてくれる。大会当日に私が良い結果を得られなくても、クラスに貢献できなくても責められる事はない。期待すらされていないだろうが、出場前は必ず「がんばれ。」と声をかけてくれる友だちもいる。きっとその友だちは人の人権をきちんと守ることができている人なんだろう。私にはできているのであろうか？

「ナンバーワンにならなくてもいい。もともと特別

なオンリーワン」「世界にひとつだけの花」という歌のワンフレーズだが、その歌の歌詩をよく読んでみると「花は大きい花も小さい花もどの花が一番きれいかを競う事はなくそれぞれがきれいに咲きほこっている。なのに人間は誰が一番かをくらべたがりナンバーワンになりたがる。もともと一つ一つがオンリーワンなんだ」という詩である。とても良い曲だなと思うけれど、私は詩の中には書いていないが、深く考えてしまう部分がある。大きい花も小さい花もそれぞれがきれい、それぞれが個である。そうだと思う。では、大きい花、いわゆる同じ種類の花ばかりの中でも同じ事が言えるのであろうかと。同じ花同じ色の花の中でくらべることがなく、オンリーワンだと言うことができるだろうか？同じ花の中で成長が立派な花も、成育が悪く形がいびつだったり色があせている花も、つぼみのままで咲くことができないう花もある。その花の中で、花はくらべたりせずどの花も自分をほこらしく思っているんだろうか、と。

私は、私自身がなかなかうまくいかないのが私の個性だと先にのべたが、自分自身と足の速い友だち

と、泳力のある友達と、学習の成績が良い友達と、何でもテキパキできる友達と、くらべて「自分の方がダメや」と感じたことはないか？何度もあるからそれが自分の「個性だ」と言い聞かせている事に気がついていて。周りの人に自分の個性を認めてもらいたいのには自分自身が自分の個性を認めていないのではないだろうか。そしてもっと正直に述べると、走るのが遅いけれど走ることができると自分と、走ることができない人とくらべて自分はまだ「マシ」だというような気持ちになったことがある。私の中の「すべての人を平等に」みられない部分なんだと思う。

今回、私が自分なりに「人権について」考えて、考えついたことは、他者に対して「一人ひとりの個性を認めている」「すべての人を平等にみる」ことはとても大切なことであるが、まず自分自身の持ち味を否でなく、肯に思い、それが自分にとってのナンバーワンであり、オンリーワンであることに気づいたら誰かとくらべたりはしない。それが自分自身の人権を大切に守っていることになると思う。自分の人権が、かけがえないものである実感が持てた

なら、自然と他者の人権もあたり前に守っていき  
ると思う。

「人権について」考えることは、とてもむずかし  
いことだが、一人ひとりが考え大切にしていかなけ  
ればいけないものだと思った。